

生きる力（二）

甲「力がほしゅうございます。力強く生きられる力が……………」

乙「そうです。力です。生きぬく力です。それについて、何があなたを弱くさせていたかそれを考えてゆきましよう。まず第一……………」

甲「第一、私は、夫が亡くなりました時、人生はこれで最後だと考えました。今お話を伺っているつくづくたいへんな間違いであったことに気がつきました。」

乙「それはよいことに気がつきました。結婚生活は最後だったかも知れません。しかし人生は常に『これから』です。人間は予想にたたられるのです。幸福に働いて、何も順当にいつて、子どももりつぱに成長して、やがて小銭でももつて楽隠居でもできる。そうした考えで生きていきますと、あなたのような身にでもなれば、すぐ人生はこれまでだと泣かねばならなくなります。真に生きる者は、常に最後まで『これから』であります。」

甲「なんだか心の黎明と申しましょうか。夜明のような心がいたします。私は第二に、この世は楽なのが当然だという考えを無意識のうちに持つていました。それは、この世界に対する認識がたりなかつたのです。」

乙「それもいい所がつかまりました。たいへんに大切なことです。釈尊が苦諦と呼ばれたのがそれです。人生は苦楽をもつてなされる縄で、楽一方ということはありません。釈尊は、この苦楽に囚われる心から解脱されたのです。そして生死は苦であると諦観されたのです。第三にあなたは、あなた自身がたいへんに冷たい人になつていられます。未亡人だというひがみが出て、人がばかにする、誘惑する、不親切にすると、いつのほどにか、心の外廓に城壁を築いて、まったく孤立してしまつています。そして異性にでも対する時は、そうするのが道徳堅固で、一切人と一つに隔てなく融けあうということなどは、一種の墮落ぐらゐに考えていられたしなかつたか。そうした一切が、あなたを見ると氷にふれるような冷たさと、ジメジメする陰影とを感ぜしめる。それだから人があなたから遠のく、あなたには自分の姿が見えないから、他人のみを冷たいと思う、他人が冷たいというご本人が、冷たい親玉であつたのです。火のない火鉢、それは殺風景なものです。もし冬の寒い日に、火があつたら、来るなど言つても、人は喜んで集まります。そこであなたは、家庭の社会の火鉢になることが必要です。」

甲「まことにお恥ずかしいことでございます。まったくとんだことございました。もし私がこのまま死んでもいいましたら、私はまったくこの世に何のために出たのかわかりません。なんだかお恥ずかしくて穴にでもはいりたい気がいたします。他人様が私に對してくださるお姿の上に私自身の醜さが出ていたことも知らないで……………私はまったく、私のお心安い方を一軒ずつ廻つておわびがしたい心さえないいたします。」

乙「その新しい眼で親族なり、知人なり、社会なりをご覧なさい。きつと変わつていきますから。人間は時に十銭のお金さえ出すのが大儀であるとともに、時には生命す

ら惜しくないものです。あなたが自分を投げ出さないうでだれがあなたのためになつてくれましょう。」

甲「私は次に、何事でも結果主義にしか考えていなかったのです。」

乙「なるほど、結果主義に生きている人は、きつと行きづまりますね。」

甲「たとえて申しあげますと、子どもたちのことでもそうでした。成績がよかつたら、健全な子どもであるならば、辛苦の仕甲斐もあるが、子どもを育てたとして先の望みはないと、こんなに考えたのがたいへんな間違いであつたことは、先に先生からも言われましたが、私だつて親ですもの、子どもがかわいくないことはありません。不具な子などはなおさらにかわいいのです。ですが、悲しい凡夫の無智と申しますか、結果主義的に考えていた愚かさが、愛をさえ曇らせていました。子どもがどうなるかよりも先に、親がもつとはつきり生ききつていなければならなかつたのでございませぬ。まったく子どもがどうなろうと、それよりも私の生活がどうであつたかが問題でございませぬ。」

乙「よいことにお気がおつきになりました。全世界中、たつた一人の母様が、子どもをありのままに抱きしめてやらないで、そして、どんな子どもの上にもある、尊いものを見出してやらないで、子どもにとつて何の親でしょう。結果だけじゃないのです。あなたの今日の歩みです。それが生きて初めてお子様がたは真に生きるのです。」

甲「ただに子どものことばかりでなくて、信仰問題でもそうです。私はいたずらに結果のよいことを早くつかみたい、そればかり考えている心が、お他力の浄土と言えどば、死んだかなたと考えられたり、あるいは信心いただいたらどうにかなるのだと思つたり、あるいは、とんだわき道をして、現世の祈祷をしたりしたのも、みな、結果主義的に考えていた迷妄からでありました。」

乙「そうです。信仰生活には、もちろん安心もあり、一大転回もありますが、それはけつして、卒業したり、これですんだりするのでなくて、いよいよこれから生き得る出発であります。洋々たる航海へのはじめです。念々刻々の中へ如来が生きてくださるのです。生活の重点は現実にあるのです。私どもは、過去にもいないし、未来にもいない、ただ現在に生きています。阿弥陀仏は現在の仏です。われらの大信大行の背後に力強くはたらきかけていくくださる大願業力です。一切の不安、自力、うたがい、はからい、等々の嫌なものを打破つて、この本願力が、念仏となり大信となり、光明となり、力となつて、活躍してくださるのです。この如来の本願力に目ざめるのです。ここにおいてはじめてどんな苦悩の中にも生きてゆけるのです。」

甲「ありがとうございます。まことに如来を殺してしまいました。これから聞き替える気で求めます。」

乙「第五に、あなたは、独立と孤立をとり違えています。われらは独立すべきもので、孤立すべきものではありません。もちろん、依頼心ばかり持つて、乞食根性に生きることはいけないうことです。かと言つて孤立することも許されませぬ。大木が青々と成長していますが、大地に根を下ろさないうでは樹は生きられませぬ。それ

に、水、日光、空気、それらがあつて生きています。それらの恩恵を受け入れることによつて、初めて独立できるのです。私たちもまたそれです。社会という大地なくしては生活はできません。さまざまの恩恵は私を真に独立させてくれます。ちようど如来による他力本願の生活がけつして人間の独立を奪うものではなくて、恩に自覚すればするだけ、強い独立者とならせてくださると同じです。あなたは、つめたいはからいによつて一切から孤立しようとなさるから死にたくもなるのです。孤立の間違いがわかれば、一切の中にわれを捧げて生きる独立の天地に生まれて出て微笑しようではありませんか。」

甲「よくわかりました。まったく長い間つまらない日暮らしをしていました。これからやります。求めます。」

乙「ではちよつと休憩しましょうか。……………」